

生田川の付け替え

1. 生田川の諸元と概要

水系：二級水系 生田川、河川：二級河川
 延長：1.8 km 、川幅：約 18m、深さ：約 4.5m
 流域面積：11.1 km²
 (流域：神戸市灘区・北区・中央区)
 水源：摩耶山、河口：大阪湾

生田川は六甲山系を源とし、布引貯水池を経て神戸市中心部を南流し、神戸港に注ぐ二級河川である。流路は短く急勾配で、市街地に近接している点に特徴がある。

2. 生田川付け替えの沿革

江戸時代から明治初期にかけての旧生田川は、川幅が80~100mと非常に広く、現在のフラワーロード付近を流れていました。六甲山地からの土砂供給が多く、天井川を形成していたことから、旧生田川の河床下には玉石層が残るなど、土石流の痕跡が現在も確認されています。

平水時の水量は少ないものの、豪雨時には急激に増水し、氾濫を繰り返す暴れ川であった。このため、外国人居留地や港湾施設に深刻な被害を与えていました。

こうした状況を受け、外国人居留地からはたびたび改修を求める声上がり、流路を居留地から東へ遠ざけ、最短距離で大阪湾へ流下させる計画が立案されました。

工事は1871年(明治4年)3月に着工し、突貫工事により約3か月後に大規模な付け替えが完成、現在の河道へと変更された。旧河道は埋め立てられ、その中央部に道路が整備された。これが現在のフラワーロードの起源となっています。

この改修により、洪水リスクの軽減と都市基盤の整備が同時に図られることになりました。

3. 加納宗七の貢献

1871年(明治4年)に実施された付け替え工事においては、地域の有力者であり実務的推進者であった加納宗七が重要な役割を果たしています。

加納宗七は、神戸開港後の急速な都市化と居留地の形成に伴い、生田川がもたらす洪水被害や、交通・都市発展上の障害を早くから認識していました。



図-1 生田川の流路
 (「川の名前を調べる地図」より複写)



図-2 生田川下流部の新・旧河道

旧生田川は天井河川化が進み、豪雨のたびに市街地や港湾に甚大な被害を与えており、加納はこれを地域経済停滞の要因と捉え、抜本的な河道改変の必要性を強く訴えました。

また、行政当局と地元住民、土地所有者との調整役として行動し、付け替え工事実施に向けた合意形成に大きく貢献しました。

当時は近代的な土木技術や公共事業制度が十分に整っていなかったが、用地処理、費用負担、工期短縮といった実務面において、加納宗七が現実的な解決策を提示したことが、短期間での工事完成を可能にしたと考えられています。



写真－1 旧生田川址碑



写真－2 加納宗七像¹⁾

その結果、新生田川は最短距離で大阪湾へ流下する安定した河道を得ることとなり、旧河道跡は埋め立てられて道路として整備され、後のフラワーロード形成へとつながりました。この都市軸の成立は、神戸の市街地拡大、商業活動の活性化、港湾機能の向上に大きな影響を与えました。

加納宗七の貢献は、単なる一河川の治水にとどまらず、河川改修を契機とした都市構造の再編を先取りして実行した点に特徴があります。この点は、後年の湊川改修や六甲山系砂防事業にも通じるものであり、神戸における近代治水と都市形成の先駆的事例として位置づけられています。

4. 加納宗七による生田川と藤田伝三郎による湊川の改修事業の比較

明治期の神戸における代表的な河川改修事業として、生田川改修と湊川改修が挙げられます。両事業はいずれも治水と都市発展の両立を目的とした点で共通していますが、主導者の立場や事業の進め方には明確な違いが見られます。

表－1 生田川と湊川の改修事業の特徴

	生田川 ¹⁾	湊川
着工	1871年(明治4年)3月	1897年(明治30年)5月
竣工	1871年(明治4年)6月	1901年(明治34年)8月
改修要因	外国人居留地・農地の浸水	新開地下流の浸水被害
	土砂堆積が神戸港の施設に悪影響を与えていた ⁵⁾	流下土砂による神戸港の埋没
	市街地の東西交通の円滑化 ⁶⁾	神戸・兵庫の町の分断
河川形状	天井河川→改良	天井河川→改良
平面形状	くの字→直線河道	直線河道→くの字
新河川規模	幅18m, 深さ4.5m, 延長1.8km	隧道規模は幅7.3m, 高さ7.6m, 延長600m
貢献者	加納宗七(1827年－1908年)	藤田伝三郎(1844年－1912年)
特徴	3ヶ月の突貫工事で竣工	日本初の河川トンネルを含む
跡地	中道以北(三宮駅付近)約41,700余坪を加納宗七・有本明が5,518両(現在価値約46億円)で落札 ⁶⁾	旧河道約6万坪を湊川改修(株)に無償譲渡
共通点	現代のPFI(Private Finance Initiative)に類似した明治時代の官民協働方式	

生田川改修において中心的役割を果たした加納宗七は、地域社会に根ざした実務的指導者であり、地元住民・土地所有者・行政の間に立って合意形成を図った点に特徴があります。短期間で付け替えを実現したことは、都市改造を先取りした先駆的な試みであったと言えるでしょう。

一方、1897年（明治30年）に着工された湊川改修を主導した藤田伝三郎は、大阪の豪商・実業家としての潤沢な資本力を背景に湊川改修株式会社を設立し、会社組織によって大規模土木事業を推進した点に特徴があります。日本初の河川トンネルとなる湊川隧道という当時最先端の近代土木技術を導入し、洪水防止だけでなく、神戸港の機能維持や都市交通の改善を同時に達成しました。

このように、加納宗七が「地域主導・合意形成型」の改修を実現したのに対し、藤田伝三郎は「資本主導・技術集約型」の改修を象徴する存在です。両者の事業は、神戸という都市が近代化する過程において、土木事業の性格が段階的に変化していく様相を示しています。

生田川改修がフラワーロードという都市軸を生み出し、湊川改修が河川トンネルと新開地という新たな都市空間を創出した点を踏まえると、両事業は治水にとどまらず、神戸の都市構造そのものを形成した二大インフラ整備事業として評価できます。

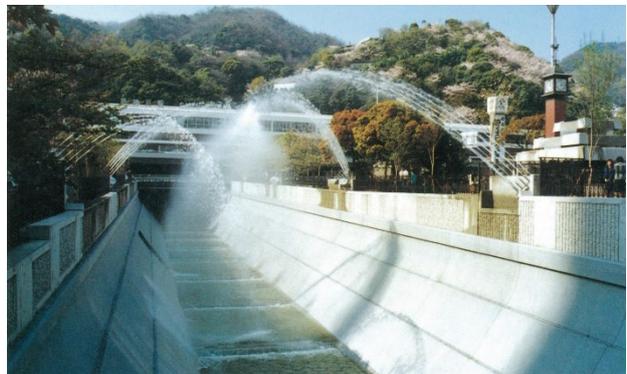
5. その後の生田川

1932年（昭和7年）に生田川は暗渠化され遊歩道が整備されましたが、1938年（昭和13年）の阪神大水害により暗渠が破壊され、旧流路が再び氾濫しました。そのため再び開渠として復旧され、現在に近い姿となりました。

その後、1987年（昭和62年）に「ふるさとの川モデル河川」に指定され、神戸のシンボルとして整備が進められました。同事業では清流の復活を目指し、六甲の地下水導水、放水広場や水辺広場の整備が行われ、市民に親しまれる水辺空間が創出されています。



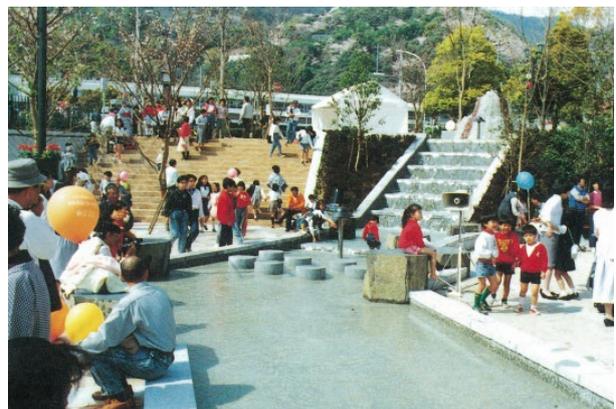
写真－3 新幹線神戸駅下流



写真－4 放水広場²⁾



写真－5 生田川公園内 水辺広場



写真－6 生田川公園内 ふれあい広場²⁾

コラム 加納宗七

加納宗七（かのう そうしち）は、1827年（文政10年）7月16日に和歌山城下町の北ノ新地銅町に生まれました。生家は紀州藩御用商人の宮本家で、酒造業や廻船業を営んでいました。結婚後、宗七は姓を加納と改めます。若い頃から勤皇の志士たちと交流があり、土佐海援隊と行動を共にしたことで知られています。

1867年（慶応3年）に坂本龍馬と中岡慎太郎が京都で暗殺されました。この事件で真っ先に疑われたのが紀州藩でした。半年前、紀州藩の船と衝突した海援隊の伊呂波丸が沈没し、坂本龍馬が強引な交渉によって紀州藩から多額の賠償金を得ていたことから、その怨恨ではないかと噂されたのです。これを背景に、海援隊の隊士16人が京都に滞在していた紀州藩公用人の三浦安を襲撃します。その中に加納宗七も名を連ねていました。

この事件により一時は追われる身となりますが、明治政府成立後は材木商・廻船問屋として事業を拡大し実業家として活躍します。加納宗七の名を広く知らしめたのが生田川の付け替え工事です。現在の三ノ宮駅近くの「加納町」という町名も、彼にちなんで名付けられたものです。また、フラワーロード西側の東遊園地には、現在も加納宗七の銅像が建てられています。

加納宗七は神戸だけでなく、故郷の和歌山においても紀の川や和歌川の改修、鼠島の整備、現在の加納町一帯の造成などに尽力しました。神戸へ移住した後も、土砂の堆積に悩まされていた紀の川の浚渫事業に私財を投じて協力し、その功績により和歌山県から感謝状が贈られています。

参考資料：Wikipedia「加納宗七」、ニュース和歌山「ふたつの加納町」、2018.2.10.

【参考資料】

- 1) 近畿地方整備局 六甲砂防事務所：六甲の川物語「生田川物語」,
<https://www.kkr.mlit.go.jp/rokko/rokko/study/ikuta/iku-b.pdf>
- 2) 神戸市土木局防災部：生田川水辺空間の整備, https://www.rfc.or.jp/pdf/vol_06/P_07.pdf
- 3) 神戸市 建設局 森林・防災部河川課：フラワーロードは昔、生田川だった,
<http://www.city.kobe.lg.jp/a43553/kurashi/machizukuri/river/ikuta.html>
- 4) 神戸市：KOBÉ 神戸の近現代史「生田川の付け替えとフラワーロード」,
https://www.city.kobe.lg.jp/culture/modern_history/archive/detail/history_05.html
- 5) 村田誠治：神戸開港三十年史, pp. 434-439, 神戸市開港三十年記念会, 1898.
- 6) 神戸市：神戸市史 本編各説 再版, pp. 471-473, 1937.

文責：CVV 会員 栗田 秀明, 2026年3月作成